1793
13

門 3遠へ
1793

本朝

明治四十一年四月廿四日
藤野潔氏遺愛之記

本朝

巻下

第二段

骨董の大長屋の表側の入口を
和子代という婦人が覗き居て
貧乏蓮の葉のぼうぼうと
露の玉うち乗れるを
こそこそ話すを聞けば
の愛敬あれば長屋中が
みちのくと門口が

甚ト八ツ三大ト郎ツ大蔵ツ三夢助ツ孫左衛門ツ権七ツ
雲龍ツ権ヲ乗ツ八ヲ乗ツ嘉ヲ乗ツ
おおく 御ちよ ヲヤまあくさん ツヤ嘉さん おまゆで
どれくもサアおいでんせ そちらで
おりまもつかぐや屋敷へ上つしやい大きふ歌ふ踊
ますてみなくくうまいのさんで
今ときとそうますおさ今やくく豚まん肉は
ござますさ あれハちやうめのざ奴おうら
山屋のおかけぶ時ふおチ代さんそうさん名ふ揃て
来さもつ外でハへらめくさでめつそう
ごもつこんみあそのばん晩大家ゑへよばれさ
そこそこばつかり食てけるものあんまるまるふが
みうろうとおもつてまりんの茶番でも
やうそうしいのさんで御ざりまうそうも
ちよつとそこそこさんみの緑で
そそのの事ふまで物言にへくま
やうしてくといそうもふざみれもくと
いおだまはつかんぶへけりやア

たくけ袴でおそでこんなるがみ形まへござる
ものも一段ひんまりやアござりません
あるハ四へまわりやアあるまるのござ
せんぐちござ狆言ハアア御免なさるまし
[お代表]それハみもふろござろうござろう
大家さんがおんなへんろござろうござろう
[加え]ヲヲトかゝさんそれハさづひまさつき
大家さんかゝさんくござりやアござりません
それハ多のこぐんでもおすの晩
[ちよ]それハ随分
夜ひるさハぐがつとおかへ[お代表]これそ
免ぐだい事ござる[ちよ]それハ
嫁ハとぐとつもんざござろうよかいまか
ことハうまひるもるめくよぐまも大家さんへ
狆ふまりやアあそのざんまま
もるとさの顔がサまそふんーそうぐ
[加え]おこでもんでもおもんさハぐつもりぐ
狆言ハアアのふーこがよろほうアノおよぐ
素人芝居とハ本のやアそのつま

こんなかたちをくみつゝそれハコろんくゝとなんでも
やくにん淨瑠璃狂言ふうにやくをかたりつゝ
役者が多いうむたゝかひの忠臣蔵で七段目をかんなかやつこそりおかぢ定りのいつのサ右くこゝハよろ
氣ハみんな皆くに大あたりくさつ來おれがたゝく役がある
大義天川やの義平ふうりてく呉六仇討ちごんめふ
義平が出るあんろ六段目ざやあるめく 孫右ニそも

大ぜひざつ天川やの幕ハ三段目ざりのはなし三太郎十七ハア
どうもさのぐるこんざ
おぼつかへハく大義ふのさく
きうせてくみせく皆くまがいく
おめふみよろ文句とろ
いく ちよヲヤ叶ほんの箱小ちゃ目がえゝみん
うくさんきうみちんう初代表イヽエとつこのの子う
きんぽーてまんろ ちよヲヤ驚小出てわら

宮小枕
ふくんで
居ル舛
色ゑとこ
ぶらんが

甚六
三太郎
大藏
夢助
孫左衛門
櫂七

雲筑 櫂を乗
八を衛 嘉を乗で
今り舛

ぶんが
きんぶら
あて
ほ覧
ゑさ

サアはらんるせく　車坐ふこぞうよっぴ
ひっぱりくっ儘んで居る　ちよ　みそのうち
ろくしっちょろっ髪はすうっとうしろ
ヲヤはくし箱のごくいハサ　おちよさんふも
いてん気ざの　ちよ　ヲヤぶざさんちっとおんな
せく　まま　えんといよせひ
ひろ長屋の左次べえ大ぜんよりなろく
のぶえんるのアイくけぶの当狂のんでる
ヲヤおっくうずん娘ん

髪もつむごくすくよへのおとと云ぐら迫ごろの
いろほいっぴんさしざのびん棒ざのもつむちっぽ
ほっぽりけへっぷものほいれるでどんる魁でも
あまふ狂へのせっきてへ今の風き気ふ
おふが見けへ時ぜんいっぴんざといっぷてもっぷ
くさ出ぜてとろがそれはまろこれはまよ
ちうろろどもめくざのそうおそうかん
くそうらのせっぷちあんざらっぱくふ

やつぱりうつくしくあつてのちまで
色は白いしつかり鼻はすわる
あのくらゐの時ほうそうはしてう
ぐつと顔がくづれて鼻の形がおしちやつ
それでも見るせう外に様子の棒でつく程も
もへかれこれ今でも世間のやうにどつさり出ては
きつぐるおいこまるのよつぽめへぐらも
うはれつきであつぱくがみをだで見るとでくが離が
あつびてまつくのの小色でもつくせぎいお様へ久歩二の人まり

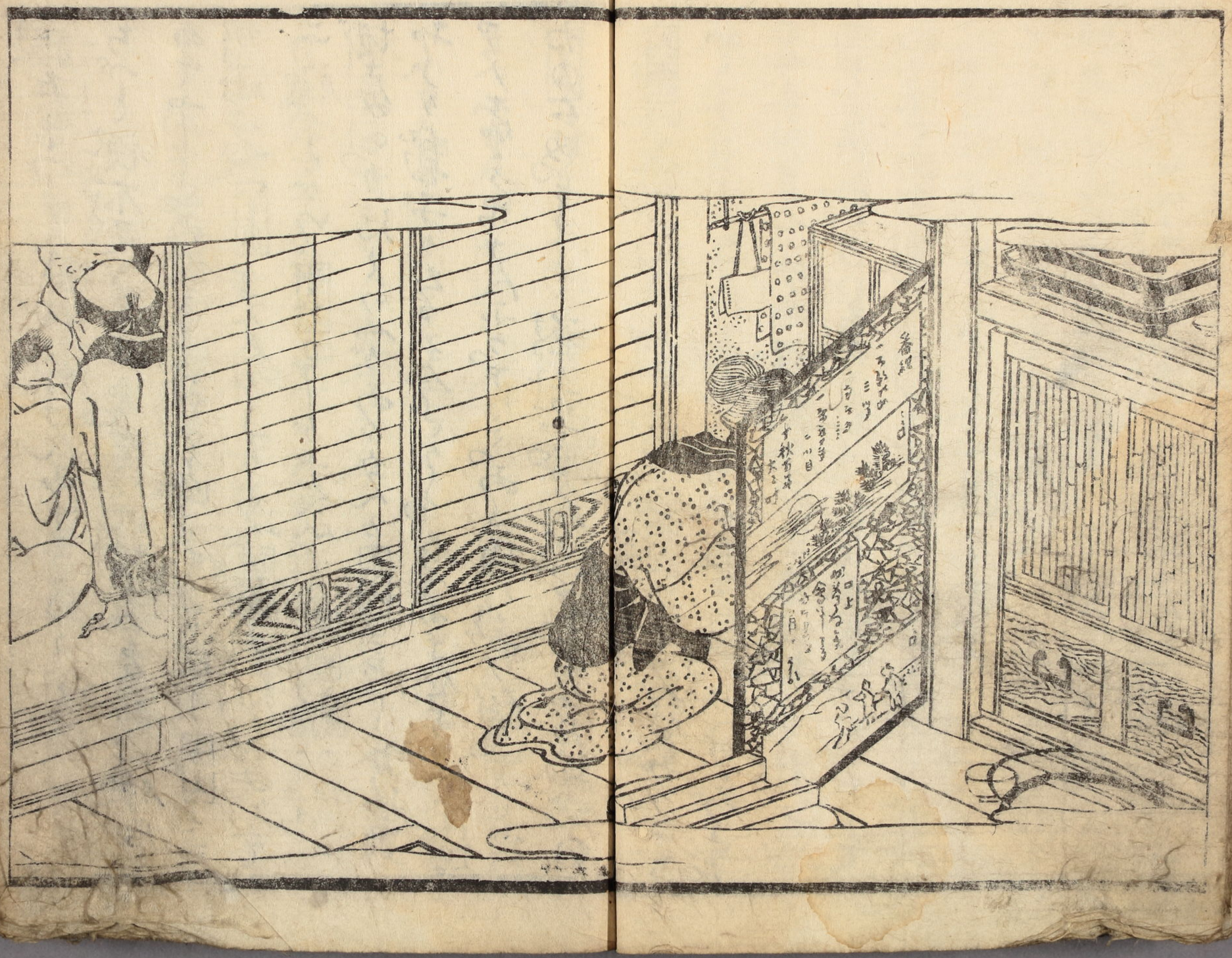
男の弟子はとるまいはすまいぬめもこそ
十九とゝんでつや死年
氣はつけおへきりやア
のばかいふのやうに
やうまいもすぐしんこんと祝こはのへおろへ這入
こんでつて居ぜともけへ帰がいくいちよいくさま
あすの晩ゆまつぱんぐまばらんなお、おさんの正でとぶ
おかりろんつ笠やがあるとサどこふ故者がおるの
八ツ半だアさん又まよりぱ表ちへ後ろへんるつて家お居るハ

手 こんさ ゑゞ 独言 はするの あれまア
ありこんさーもがけ ぎんすもの おこまも
吐ほーてくれまうあ ん ひとく 長命 ん 届
おまう又もけてぼてるまいありそもも
移へもんざ 図 あるほど 話 多 おめへ
こまぶせんでもいけるあ心ぶよ 手 ラー 発奮多
でざれぶんへごあぶござれ 河東でも長唄でもこごも
で浄瑠璃でも新内がでもさんでも久でも
むしさ 佐ぶでも能野でも三味せん多あもんまも 民権

のこんで居さがこんるたとすれてもまアあ
おもうのみや田ぶーさがいく 役者のうちへ
女ハまぜ移へ 手 ヤレモとんざ事はいん人ざなとの
並でやまさ王子路考ゑん 手 何 男が人の女房ふるまんざ
ふまれし男であアこと 手 イヤくまんちぶもとぼけてざアさんぼおうふ
居 主や主ぬう 貴 おれでいん茶ぜんめんてるうなうぜ
手 どうしてつるうあぶりのまんおれも
こて あもちがよんずんかうふるへエ

これはどうもお気の毒さま
かしこまりました
とみてみんなおどろきさん
うけてだんまりもうはあ
ゝあつくバイのバイのさん
家であります独言の役割
さつぱり由良之助一カ屋の亭
そこで長二さんが九太夫さ
大義が俳内
いろんお世話ざつます鼻
おりゝん手水
父まんのせく次の役割
大義この役目はちよと
むつざ大義大義
大義やつぱりおれざるぶ
すゝ、ろんでもつて寺
おれがするく
指七アみるし
指七和さんの千嶋孫五郎
ぬしの小金さん矢柄間五郎

失礼とやらは
の髪かんざしである
生ざうちよと湯
落書よ
七ツおちよえ
ほんの生んつて俳内つぶよか
ヨヤくいをいてよ
いやだんまりをきめるのそ
職め
これさんのそ
寺岡平右衛門
指七すゝなぜ
指七ワヽヽヽとおどろい
寺器へエ〳〵平右衛門つて
て絵て作兵衛



孫左　まだ孫つさんざ　ちよ　ほんふよろ〳〵まゐ
ちつと役不足ざろうが雪紙切と愛助仲居と
あてやつてあります　新の通りでよろ〳〵　ちよ　モシ
加減ほりへ　八三郎　サア人ざつてろ　孫左　力弥ハまだれで
二役するがいゝ　雪之　ヨシ〳〵　愛助　歯のぬけさ
切さゝのかぶしいつがあるもんろ　孫左　ヨシ〳〵力弥ハ
おぶろ息子がろるそざろう　愛助
アノ品を紙さんかろアハこあり髪うでふハ
わのろ役をして巻舌でとんざのさこをみ力弥ざの

八三郎　イヤ〳〵まつりざんの親子でこいつをよろぼど
きつゝもんざ　孫左　なれてすぼりとまさまざ
八三郎　そんろうざふりぼつけやまつり
孫左　何サ　まざおもいれがありやまつりハな　孫左
そんろうざふくやつて見やまつりおちよそんちつと
きゝて海て見てくれ　八三郎　ヨシ
アイひさやまつりこでそざめてくれろ　孫左　何よ
サアよろしうござりまし　孫左　まづそでまりふ也
役者が一力屋の真しぐふれ大夫と伴内ざつサア

おめぐぐやのぶよ 葛六 もり 又度もよんで

葛之 ザノ〳〵ごんるが所づいて居るを此書も始め

ちん本屋まゆしがほうりなげして呼ぶさえ絶ぬ

見ぐれなくしさうえ又あさ田數が多くてこの色

ざつくさざだけであやまるう躍く々画ふく世話の

紙へやつぶつと隅へひつぐんでぐんなぜおうおちよさん

仰天愛敬ふ生てゐつでいる処へ 葛六 時ふ又

ありてへなんぐ見るがやぬまぐおほうる 葛助 加之さん夫ハ

何氏なのぐ 葛六 其七股目のほんぜ

葛之 正本のうきぬきといふあんぐんぬあつてやうん

つありぐごのツレ宴ふロ上があつてもあく假名手本

忠臣蔵七段目夜人替名のセリ尸一カ屋三吉大谷

三太郎の仲居和勿免小佑川爰助はおうん岩井

雲助ハ十一時孫五郎芦萩野八重垣竹森後

澤村様ゑ矛つ矢依間重太郎板東孫左衛門大星

力弥尾上品を絆つ路鷺坂伴内嵐大蔵十一吉三吉

坂田権七つ嘉吸平女房秋

松本甚七ハ大星由良之助市川あゑ絆右ゑ形れ

相つゝ
ちよ 二味せん そてレトつゝ
あくりの
ぎゃうどうぬりぬりぬり
そくやげんこふいるすいめ
どろつくや ドイナノワイトサ
いゝどころ サアたいこの
ハテ目がなくて
假名手本忠臣蔵七段目大字六行ほひのぞん

大盃カチく
の花があそびぎばん
ぼう
心方あみだの
そひっくりひっくりひっくり
ぬってぐんどろつく
モウやってもいゝの
九太夫の言葉ざ〳〵
ナトよ
まいがエ〳〵
んざ

これ甚六さん それ
うふのざ
サア筋
それハ上表帛ざコレサ宅の所
多そうのまうつエで
それハげんかいそがしいつまじや
どうこまはる コラハア
まぶるく
そでめてエのおろ
アレこがまうそどろ
あげエまそざ
ハあるろ
ハあ六さんく

をれでハそこで義右夫本の素よふふるつてよりうーて言葉ふちつといふ色はつけてエーくと
いハどふやりてくすんざ 永知ざーく 七ノ
今ざんハアのの国息子ざんのうつ出そこでもア名ある
ざそちはおくくうきこんでアけ様ハアさげつてござり
やアのいそちんざーきべエあんてござりヤスヨ 三六南 そりや
又くものすぐ受けであぐうハエー 昌六さんそれでハ
まこあんまりつとれすぎて和泉内でも出さやぐ
志うーをこそちどうやつて出きそうざ

ドレつうの本はうーみせんこうりト こともよりつたくそ
よりこそくふおそのやア
志うざおそれみれうこてもよりつ
よびさざそうのアひうてあそ
面ざいてこうおうぐこてゆ
ちーが出る赤ぶのリレ孫左こ
千崎の矢佐間ふ竹ちぐ
仲ノ居ハぐアんアみちぐ
これおそちふ好ぐしてア

サア見えねへ/\そこぶの次ざうや/\
うんゐうごぜへてねるかのサア/\ 仲居ハどうしさ
/\ 雪つく そうでてねるほうへ 清助 うつく まのうるほうへ
ソレてのなるほうへ 与作 モウ格ご格がぬけて
ねちまふ/\ 雪つく ふうわれぬ
プツ/\ 清助 とうまよ/\ 清助 ヤレ由良かぬまゐ
ハアのうかぬやまゐ 清助 とうまくてさけのまをく
コリヤとうまくくれ 雪つく ワアくうんまゐごく
ひようつうまれてハ扇のちぎがやぶれるハく
清助 コレサうんつく坊ばとうまくくてハアとくろが違ふ
孫右ゑつさんが出ても失礼ながら十九ぢでござりやす
なんとまあるといふ所ざ 孫右 サア仲居の詫言葉つく
ござなさる 清助 ヲヽへの毒ぢや 雪つく ヲヽへの毒ぢや
おしかもそふさんぐらアノおしかもそふさんとお願ざんす
何ぢやいなのうおしかもそふさんぐらアノおしかもそふさんナア 内 サア
あんごべちやア格へまかうふとんざ仲居 あふ
まうざせめて歯が二三本もあればいゝがのう

つぎはきもうそふもあるやまるぜ　右ム　京あく
愛助　すこおうんさんのかたぽんと酔りこんどもこハん
つぶして　右ム　みこハ新しくてといふぶ　愛吉　かちくまぶ
猶言ぐんぐんノ　右ム　ハテおやくぼくとも
いハ移くきりやアこいくもへハナ　右ム　んうさ田のみそうやけバ
もぶつ時ふこゝらも中ゝ〳〵出来るふ也先きハ
やふうそべんサアうんるがひぷこんでこれふてふ器
革なつの植七生ぷせ　植七　デゝニハ生るぶ〳〵
右ム　ヲゝあぶもへもぶうふ立つやゝりし杖ばやぷてんな

植七　トゞゞゞどうくタゝタゝ立テみうぶ〳〵
愛助　植公も久しんよ
みこんつくはやるふよどんくぶこまぷさもんざよ
ばゝ梅んもモウおゝハはあれざ〳〵
工へくつゝつゝ雷亀ふ　大笑
居るふよ　植七　ヲヲくおゝ　植七
右ム　ハテサの寺島来右でごりまぬとふのぶ
植七　リゝリゝみこぶ〳〵二アつゝ其先きハ
おぷてんな　右ム　てる島来右こうのでおぬも

まくう度(どう)も出(だ)へおひ飛(とば)きやのくふれつぼおーのろん
足(あし)ぐるどのの 権七 うーうーくくく

けつく[illegible]がおつていよ〳〵ようすがあらうと
氣のせくやつ〳〵親父の寐いきねんがて[illegible]
ひつくりまくらぐ〳〵
獨言のやうに
島子 エヘヘはつけるかな
大親 眼差多く渋太夫さんのやうで
ちべよ 島子 コレサ不吉る事ばいふんなの
でもつへきやア去久しくほんとのようすさやア

あやまつたおぢさんちよとのすりこぎでもつて
くんなちよ 鍬口ちやんとおろせば 島子 むつくと
起てやア面洗ひやカ[illegible]ずりとぶのやうに
こんなの者ひぐ色に急あつそうひそう
島子 多つく今くみでくるかよりこれよつて参
雜きやくのナニガ足ばいふ
うけ[illegible]すさ[illegible]ザ 島子 ムウ外の所へ
そそ[illegible]ハツ ちよ そつとめでまわくの雜

[和文] サアくこれふたつ
おより [字音] ろんざおるの出そざも氣おくハまへ
おんばば指言ハ知るもくとおもつていやおふ
もうゝまハて今出ろちざろ〳〵ーんざんえ
えるより先き〳〵生ーていく節ざまれもふの
事〳〵ふいゝサアよろまんーて出てやろう
おるふもうがある [天竺] ろんざざざ傍ろ〳〵
招きもんざのすびくせるふむもふぼちく
で出来ものくおとざふけざとんと天井板おふ

両もりのもうとふ肌合ざ [愛助] おそーて
ぼろ布子で多くざれざりめてるおのれも
よつぽでおふしくおくるおるハお服の十五音ふ
明神さまの鳥居まくでうろさく仕てある
くおよ [大竺] アレ見ろ笠中ふろつて居ろうふ
何ハそてもやしきへ [和文] コレくろざろさん
ちよつとおちよさんの事でまりて去失ぜ
[ちよ] アイ真屏風ふうみてあるのでまい
[子ま] 黒繻子やぼでろへのこつハすく

ふるりくよっぽどつづりるざろうちらと
ねべへそへど錦の羽織も持ってるんざ
がそれふ見ちゃアるハヤっこうるちろんざ
大義 仰へどおーきの羽織よくしめすっぷけの
みうりゃアるざおーきの乃ちげくざゃアあへう
子手 おいふごろうがなんでもどこのう玉で
猩々ゝ酒はのませてやもいれ屁をひらせて
其へ心で洗るのをどば綿とるみうりざ

大義 うるほどふれば焼けがありざゃきんるふ
おねべ猩々ゝ苧ばくハせてやもいれ屁をひらせて
其屁でおるば猩々ゝ屁とるがちっぺてねろ
子手 へ其ふおるこばちろ手へでつまろもんろ
みうりゃアりがは髪ハ長ェアざそ
まちみせくくちろうがあるんの駄ぐとと
かもっぷかれかハ短ェくて結べ
三重まハーてあとがくて結ろ
子手 みうりとハ知って居さがあぐってもくもイろ

六ツまいりさ。ぜんろくこうくの丈よりろう 大義
若ろう衆もあんぶばるさんとくまへくまいりるせへ 義助 おう
大義 アレ見ろ。白イおめんのかぶりくするせ 加之 子ごまさんきめごくおうざく
所作する形がどうもいへ孫へ学ハちよいと指びかぶもるせへおそうざく 大義 お市がべっちよくなめろう
ろよっ。ちんとしよ所作するぜ 加之 サアこんろうごま盆
ンレ子ごまさん本代見ろぶやんるせへ 多満 ムウ 読書

さん用ろう。ろんでもよろう。無筆ぎゃアろへぐ
其本代よろう。ろやア及バ手へ表の八百屋の百兵衛ぶの
娘が毎日ちろさふ所で出来るほど憐て知って居ぶア 加之 きめくみんでいすっぽりといくへ 多満 すっぽりと
やんるせへおれもおもいれやろう。ヨサア来るせへ
大義 おえさんおつと免ハっぱ四文ぶよ 加之 いくく ちよ
もるせへ 加之 いくく ちよ 杉小二階へ
おかるい急ぎまっ。ぞや里元へ これてぐ風ろう

ねる亦へ 右ノ コレハシタリたぜの もうしぶりや 良ノ
亦へ父よ母よとなく 泣きけば 父助 ヲヤヲヤ
ちよ へおくり見まい 由良の助 コレナ子ぞうまんなもつき
てうぶよの長みいにぶんなのり 敵や先の 手ぞろぐ比
ばーて躍るもの 右ノ 時ぶこれでいゝやくと 取んで
居ィおんぞんぐるいお免へ ハニ階でもければ るぬテどじさ
もんぶろ〳〵あるく ふを殺ばくてくんなサアみぶつやさん
ばうくてのうなせく 左ノ 天義 こいつとうぶ見せぬ

ちよ へよぶの恋よとうぶ山くもろいう人よりもをうせど
右ノ トウモまぶひくゝ 高ノ 声ぶのせろとよぷほぶでるくるりレあぶぷり 左ノ
アよいところちよ へ夜回り家慢も勝呂ひんろ
のべ後 右ノ ハテドウモまぶ俄ひんに長 ちよひぶらもかてくんな
やぐのよへぼぶらとおをちぶでいまぷといゝそしまぷくり
左ノ こりやアよぷ程よろふくん 右ノ なろんろおんぶて
やろうごろまてゝし上ぷ ほぼ こりやぶ
遠ぷてア、こいんく 右ノ ソレいくぼ よんとこる

する○と天井へつく〳〵 [天丸] いよ〳〵
うへ○とのぼつて○まいる○バリトウ〳〵
文蔵 [品之] [ちよ] かしてうやてよう〳〵
[品之] ハテ○おめへ○又○もつと○ひろ
おめへ○豚ぢや○ねへ○ちやせへ○皆○中の
ソレのぼるよ [基八] アイタヽ〳〵○尻の
[品之] ホイこれはそうぢや○ない
おそうなもんぢやあるいく○おめの下がなるほど○この
こうやぢの中へ○きりなせへ [東八] ヤレモ〳〵げんなことぢ

らバ猫ぢ○ないよう○ちうよ
あるはづだうもそんなバいくが○
猫でいるくつてるまうと○ [東八] ヤレまづ○おまへ○ちいつぢで
[手丸] ヤア〳〵おんなおいごうて○ [天丸] それ○
[品之] ヲツトちつくぢ〳〵サアよう
月夜ぢ○ひとバ○ほどけるぢ○
今九太夫が首ぢ○ありや○尻ぢ
まつひつぢらが○ひつくりくつて
藏ぢバ [ちよ] ソレぢやさんが

水よはまと想座中のこぶ正ばかへとおさいぶ
成てゐ種さんやとむまぶふようぶおふ
ゐ〳〵気づついて 手ゐり〳〵うゝ汗 和え 山家が付ぶぞ

皆く一同ゞ 目出ゝ〳〵

〇はぞんろ、ハ女ふて狂言ハ此メ小相成りいへどもいよく明日の大家ゐ
ふて大摺舞ゐ長ゐ屋中のこぶぞみ出ゐ種ゝのおもしろて
座しきの酒盛給仕ゐ若つく〳〵等仕支ハ後編ふ
あゝハしを入仕ぶてゐ赤勢有のおやしき書ぶぞへぶ
手なくさをふ始ゐを免ゐ申ぶぞ迚ゐ口上ぶぞ

口八丁巻下